



乱

RAN ③
麦社通信

《市民》の視角とアナーキズム
現代技術と連合主義
言葉の危惧③ 少数決
わが国における反逆の原点(3)

高 島 通 敏
D・ゲラン
秋 山 清
鳥 越 弘 之

構造

四月号 一六〇円

特集 教育

「政治と子ども」論……………村田 栄一

教育再編と七〇年代へ教育闘争……………全関東教育共闘

女子教育への告発と婦人労働解放……………矢沢 洋子

労働力再生産工場のふきだまり―各種学校……………安藤 紀男

教師の意識と評価権への試行……………藤沢教師反戦派

経済構造社

中央区京橋 2-4
Tel (272) 2659

反国家と

自由の思想

大沢正道

いま、ぼくは住みなれた「アナキズム」の地平から、
ぼく自身の必然の世界へと飛翔する滑走路に入ってい
る――へはしがきより

〈内容〉序章／ぼく自身のためのマニフェストⅠ／転形
する革命思想 Ⅱ／社会主義における自由の復権 Ⅲ
／古典的革命観からの解放 Ⅳ／組織論の革命 Ⅴ／
国家―権力による最高形態

★四六判函入三三頁

価八〇〇円

川島書店

〒160 東京都新宿区柏木1-6-1
振替東京34102 Tel. 371-5935

《市民》の視角と

アナーキズム

高 畠 通 敏

今から十年ほどまえ、私たちが「声なき声のたより」を発刊してまもなく、大沢正道さんより一文を頂いた。『「市民」ではなく「人民」を』と私がタイトルをつけた小文の中で大沢さんは「一九六〇年五月一七日以降の闘いが、資本と労働の対立を中軸として展開されたとみるぼくは、この過程から「市民の誕生」を引きだすことが、どうにもできません。ぼくは一字ちがいますが、「人民の誕生」としてなら、この事態を理解できます」といわれている（「たより」四号）。十年の歴史的経過は「事態」の意味を少し明かにさせている。一九六〇年五月の「市民」の蜂起が、当時の国民会議が打ち出した「議会主義をまもれ」というスローガンよりはおとと根深いところにあったということは、私たちが運動をつづける過程の中で次第に確認していったことだし、また、大沢さんの方でも「資本と労働の対立」という古典的階級闘争観を深化させていかれたことは、『反国家と自由の思想』などを一読して推察がつく。それが、ここ数年来の「自由連合」や「麦社」と「声なき声の会」との交流になってあらわれていると私は了解する。だが、そのことは、ただちに私たちの運動とこれまでのアナーキズムの運動とが、全く同じ地平にたっているということではない。いや、そういうことはありえないしまた不必要でもある。この確認の上に立って、私は、十年まえ、動きだしたばかりのミニコミの編集者として書きえなかった反論をあらためて書きたい。だが、これは大沢さんに答えて頂きたいという性質のものではない。むしろ、私が今日のアナーキズム運動についてもっている一つの感想に近いものとして受けとって頂いて結構だ。

問題は、今でも大沢さんが「人民」のことばにこだわりの、私が「市民」ということばにこだわっていること、そのことに象徴的に集約されるといい。この問題を、私はどのように理解しているか。

私はこの問題の根源を、アナーキズムが歴史的な近代社会として、われわれのまゝに現実にあるものに取組む姿勢の問題にまでさかのぼらせて考えなくてはならないと思う。しばしば指摘されるように、詩人や哲学者に比べるとアナーキズムの側に立つ社会学者が少なく、これに対し、ボルシェヴィキや近代主義者の中にアカデミシャンが輩出するゆえんは何か。それは、歴史的な事実としていうかぎり、マルクス主義や近代主義が、歴史的な近代社会の現実のなかにある法則性、傾向性を探求し、それをふまえてユートピアを構想するという姿勢を明らかにしているからであって、そのかぎりにおいて、近代社会の歴史的現実の分析に興味をもつ若者たちを吸引するのも当然なのである。そして、それがいかに「客観的観念論」や「生産力主義」のイデオロギーによって歪曲されているにせよ、その姿勢そのものは正當に評価されなくてはならない、と私は思う。そして、そこから、はじめて現実の中から「可能性」を引きだそうという政治的発想が芽生え、社会科学的な分析と運動論とのダイナミックな関係が生まれうるのだ。

だが、法則性や傾向性をふまえるということとは、もちろん、それに追従するということではない。逆にマルクスやウェーバーあるいはその他の近代社会学者たちの理論を分析すればするほど、近代社会の歴史的現実のうちの何を「自然史」的な与件、歴史的「必然性」、近代の「宿命」としておき、何を「操作可能」の範囲においたか、その仮定のたて方がユートピアの構成の仕方、運動論の展開の仕方といかに密接に結びついていたかが明らかになってくる。それが、彼らにおける社会「科学」の内容を直接的に規定しているのはむしろのことである。マルクスにおける「社会的分業」「生産力の発展」「階級対立」などの観念、ウェーバーにおける「専門化」「国民経済」「官僚的組織化」などの概念は、このようにして歴史的近代社会の「宿命」的「必然」と規定されて、彼らの社会科学の核心を形づくっている。

ここでアナーキズムにもどって考えよう。アナーキズムが、これらに対抗して獲得にもつところの、歴史的近代社会から引きずりだした核観念は何なのか。私はここで立ちどまらざるをえない。人はいは、 $\wedge$ 自由 $\vee$ をいい $\wedge$ 反国家 $\vee$ 、 $\wedge$ 反権

力Vの概念をいうだろう。しかし、これらの概念は、これまでのところ多く「目標価値」であるしかなく、歴史的な近代社会の構成や展開を分析する核としての位置づけをほとんどあたえられてきていないのである。ここから、アナーキストが現実の問題についてふれるとき、マルクス主義的な「人民」、「労働」とか、近代主義的な「組織」や「生産力」の概念を密輸入するという現象がおきる。近代日本の社会史や社会構造をアナーキズム史観や理論から統一的に分析したものがないのはこのためだ。(アナーキズム運動史とか思想史についていつているのではない)。

なぜこのことがはじめにふれた人民Vと市民Vの問題の前置きとして述べられなければならないのか。それは、最近のノンセクトから新左翼にいたるまでの青年に支配的なムード、変革と抵抗という現実的・政治的な問題を、超歴史的な入権力Vと人民衆Vという一般的枠組の中に解消し、そこで民衆がいかに反権力的な入情念Vをもちつづけるかというレベルの問題にのみ還元してゆくことに私がつまっている危惧につながっている。しかも、わが国においては入権力Vと人民衆Vというカテゴリーは、伝統社会における「武士」と「農民」、天皇制国家における「官」と「ムラ」というカテゴリーと重なって、そのかぎりでの有効な分析用具として働らく。この意味で、政治的支配が物質的基礎から相対的に独立した入情念Vや入精神構造Vの中に独自の基礎をもつことを解明した丸山真男と吉本隆明は、共通の基盤の上に立っている。ここから先に、一方が入精神構造Vの明知主義的超克を、他方が民俗的入情念Vの世界への土着を説くとき私は立ちどまらざるをえない。この分極化には何か欠落しているものがある。そして、分析用具としての政治的入権力Vと反政治的入民衆Vという概念では、とらえきれぬ現代の問題があると。

試みに、吉本の「共同幻想論」を引いてみよう。吉本がふみ台にしたマルクスにおいて、国家が共同幻想であるというのは、市民革命を背景に成立した入公共Vのイメージが、資本制社会における個別利益の分裂を補う役割をはたしているという点によっている。この点を初期マルクスは、ストリートにヘーゲルから継承し、それを裏返している。しかし、ヘーゲルもマルクスもともに、入家族V→入市民社会(欲望の体系・私有財産)V→入国家Vという社会集団の展開の基礎過程をふまえているのである。これに対し、吉本の対幻想(家族)↓共同幻想(国家)の定式には、市民社会という中間項がすっぱり欠落しているのである。同じことが多くの精神構造論についてもいえるのである。

ここから何が生まれるか。第一に、必要なのは情念や精神の世界での自立や克服であるというスローガンの下に、「一匹狼」「精神貴族」「昼寝」を標榜しながら現実から逃避する志向。これはさらに文化革命というかけ声と結びつく。第二に、精神や情念の世界での「土着」的部分の残存を政治主義的に運動に利用する民青や新左翼セクトの志向。第三に、「土着」的な情念や共同性の中に生ききくことを求めて農村やマギシズム的農民協同体に没入する志向。こういう方向に分極したまま今日の変革運動に展望がひらけてゆかないこと、それこそ、観念の世界における安易さが生み出しているのはかり知れない影響という以外にない。

私が「市民」というとき、それは決してマルクス主義者（代々木も新左翼も）のいうような「労働者、学生そして市民諸君」という「アイマイかつブチブル」的部分の意味ではなく、ましてや、最近、大沢さんがいい直したような「都市における人民あるいは民衆」などという居住地分類の名称ではない。それは、現在のわれわれが逃げることでできない歴史的な近代社会での民衆のあり方の理念や目標としての意味をこめてのべられているのであり、同時に、民衆のあり方の歴史的な現実に即しつづのべられているのである。マルクスは、この意味での市民を「労働者」とおきかえた。そして、それはマルクスなりの市民社会分析と批判によっていた。

（マルクスには、超歴史的な概念としての人民、市民社会における共同幻想をないう役割としての市民、そして市民から現実に分化した疎外された集団としての労働者という三つのカテゴリーが部分的にオーバーラップしつつ存在している。）しかし今日、「労働者」運動のみが、またそのすべてが真の「共同性」を体现できるということが幻想に他ならないということは、あまりにも明らかである。同時に、今日のわれわれにおける疎外の構造が、物質的生産物の分配方法にのみ由来しているのではないと同時に「情念」や「精神」の世界における共同性の欠如に由来しているのではないということも自明の前提とされなければならない。市民社会がばらまいた「公共」のイメージが幻想であったからといって、その代償を「まつり」的な感激への感溺にも、観念の世界における「民衆」や「人民」の共同性への幻想にも求めるわけにはいかないのである。

私が「市民」というとき、それは、現代社会的条件のなかで、「真」の共同性を創出する途はなにかという問いと結びついている。それは、あらためて、私がこれまで「歴史的近代社会」と呼んできたところのものを、ふわけて検討することと

結びついている。それは、たんに資本制的生産様式の問題ばかりとしてではなく、科学と技術、国民社会と生産力、組織化と官僚制、分業と専門、主体性と客体化、法と慣習等の包括的な次元の問題に、どのように統一的にアプローチできるかという問題でもある。そもそもアナーキズムが主義として成立したのは、まさに、このような近代社会における個人の問題と切りはなせなかったはずであり、それは八市民Vという視角と無縁のはずがない。しかし、その具体的検討についてはあらためて記す以外にない。

雑居房

広告

△誰のV子供でも △誰のV親でもなくって

ただのコードモ と ただのオトナが

うじゃうじゃ わいわい生活して

それでいて △誰のV部屋でもなくって

国籍△拒否 両親△無し 学歴△無し 資格△無し

住所△不定 職業△不定 e t c .

それでも生きてゆく 精一杯 真剣に

そんな風にして

そんな風にして

沢山の人間が あつまって

△開放された共同体Vみたいなもの

創ってゆきたいんだよ

気のあるひと

オトナ も コドモ も あつまれエー！

戸田市喜沢一十一 長島荘

雑居房

現代技術と連合主義

ダニエル・ゲラン

ダニエル・ゲランは、その著『現代のアナキズム』の最後で、アナキズムは決して時代遅れのものではなく、現代の大産業に、現代技術に、現代のプロレタリアートに、世界的な規模の国際主義に立脚していて、二十世紀に属していることを強調したが、これに対して「アナキズムは、ここ数年、新しい関心呼び起しており、その思想は議会外の運動の中で次第に大きな役割を果たしている」と認める、ドイツの作家エンツェンスベルガーは、一九六九年に、ゲランにあてて、次のような彼の意向を伝えた。

「私が最も気にかけている（そして熱中している）主題は、あなたの書物の終りでざっと、あなたによって提起されたもの、つまり、アナキズムは、高度産業化社会に、労働の（ないしは生産の）組織化のために新しい解決策を提供するか、である。そうした解決策と現代技術との関係はどんなものなのか。この技術の集中的な特徴と、コミュニケーションの自治を目指す要求とどう調和させるのか。絶対自由主義的な社会は、情報やエネルギーの世界的網状組織のような集中化した機構、やはり集中化の傾向を持つコンピュータを使いうるのか、それとも別の技術（それはどんなものであろう？）を考えねばならないのか。私には、創造的なアナキズムが必要であること、十九世紀の思想の繰り返しではもはや十分ではないこと、未来が考えだされないとすれば、アナキズムの復活は、もろい、はかない、流行にとどまる危険がある」

このエンツェンスベルガーの疑問に対して、ゲランは、彼と、友人である技師との一問一答によって答えた。以下はその問答である。（編集部）

友人技師の問 1 二十世紀が工業生産に与えた、主要な特徴の一つ、それは「分業」でした。ある「有益な」目的の達成に必要な諸業務は、それらのそれぞれが、最も有効な道具、最も熟練した人間によって実現されうるように、それぞれの性格

にしたがって綿密に区分けされました。それから、そうしてえられた各部分は、望ましい全体を獲得するために、厳密な検査ののち、それぞれ他のものに結びつけられています。

諸業務の分割という最初の操作は、各部分の検査と組合せという最後の操作同様に、かなり厳格な「調整」を、生産への各参加者の自由を大きく制限する「調整」の機構を、実際には一人の人間、よくて、ごく少数の人間のグループである権限と責任を持つ「調整者」をすら、要求します。似たようなあらゆる場合同様に、「調整者」は、その使命の必要な範囲で、その「配下のものたち」に対して、単なる助言、示唆、注意によって、処置することができます。そして、彼の使命の個人的な適性は、生産への全参加者によって認められましょう。しかし、「異議を申し立てる人々」がいるとすれば、彼は強制的に「権威」を用いねばならぬでしょう。そうでないとすれば、集団的な努力は不毛のものとなりましょう。

私の答 親しい友である技師よ。誰が調整の必要に異議を申立てることができるでしょうか。しかし、調整は必然的に「権威」を意味するものではありませんし、ましてただひとりのものによって行使される「権威」を意味するわけではありません。そうではなく、自由な、連合的な、民主的な提携を、提携組織の各メンバーによって自由に同意された規律を意味するわけです。この調整は、生産者である各自が、資本主義制度の下では、極端に押し進められ、生産者たちの共同活動に対する防衛の武器、したがって抑圧の手段となっている、分業によって、もはや他者から引離され、遮断されていないだけにますます受け入れられるでしょう。すでに、十九世紀において、ブルードンは、「労働者に対し、関係している産業のすべての活動を順次経験せしめる」ことを示唆していました。二十世紀後半の技術が、一連の活動のすべてに労働者を通じさせることを、おそらくもはや許さないとしても、それにもかかわらず、彼を永久に同じ業務につかせておかないこと、そしてまた、あの繰り返し作業とはかわりなく、生産過程の全体への視野を（説明、工場見学、図表等々によって）彼に与えることは、可能なこととして残されています。簡単な一例をあげましょう。一九六八年五月六月のストライキの中で、パリの二大印刷工場の一つで超現代的な設備を備えていた、ラン印刷会社の労働者が行なった最も偉大な経験は、他の部門すべてから工場占拠以前は決して入れなかった他の職場すべてを訪れることができたこと、仲間たち——仕事中は決して見ることのなかった、

ただ、時々退出時間の後に、街かどのカフェで見かけた仲間たちから、生産の工程を説明してもらったことでした。

問2 業務の分割について、各部分の組合せについて、それらの活動の綿密な「調整」について、今のべられた過程は、いわゆる生産のためだけではなく、——その相対的な重要性が絶えず増大している——生産以前の研究のためにも、実用的な研究以前の、「探求」と呼ばれているあの熟慮のためにもまた、日常的なものとなつていきます。つまり、同じ「技師」ないし「研究者」が、有効な実現化に先立たねばならない、あらゆる研究ないし探求を同じに行なうためには、技術は、今日では、あまりにも多様化し、あまりにも各種の知識に従属しているわけです。そしてかなり厳格な——時には不可避免的な権威に訴える——「調整」がなかったとすれば、各自の仕事が、もしそれが尊敬に価するものであるとしても、実地的な、効果的な総合をもたらすだろうとは、いささかも期待することができないのです。

答 誰も「探求」の増大する役割、技師ないし研究者の多様化、したがって彼らの仕事の調整の必要を否認してはいません。しかし、その調整は、自治管理企業および経済全体の連合的な管理の状況の中で、完全に実行可能なものです。それはおそらく、研究者たちが厳しく監督に服している、あるいは最良の場合でも、企業の長であれ、政府のテクノクラートであれ、細いことにこだわる管理に服している現行制度の中でよりも、ずっと効果的なものでさえあります。

問3 農業生産は、工業生産がすでに従っている、分業の高圧的な態度に、もうそう長い間抵抗することはできないでしょう。それを拒否することは次第に難しくなっている、世界的な競争を考慮して、農業生産は、土地の、気候の、消費者の選択によってつくられる販路の、最善の有効化計画に順応せざるをえないでしょう。そして、自分の習慣ないし都合によって生産を決定することを固執する耕作者たちは、自分の作物を自分自身で消費するか、それを破棄する破目に間もなく陥いることでしょう。

農業経営の内部でも、諸活動はやはり、各自の能力を最もよく活かし、仕事をあまりにも頻繁に変えることによって惹き起される時間ないし能率の消滅を避けるように、参加者たちの間で分割しなければならなくなるでしょう。

農業生産の中でも工業生産の中でも同様に、分業は「調整」を、「調整者」を、そして、強制権にはないにしても——確かに好ましくない、しかし各個人の過度

の欲求不満をないようにするために必要な、——起りうる権威に訴えること、を伴わざるをえないでしょう。

答 農民が、工業生産の模範や刺戟や強制に従わないようにしうることを、誰が否定するでしょう。未来は明らかに——現在もすでに——大農業経営、集団農業のものです。首尾よく独立したままでいられる中小の農民たちですら、彼らの仕事を調整し、助け合い、一緒に購売協同組合を作り、機械を共同のものにする、絶対的な必要を感じるでしょうし、——すでに感じています。しかし、田園の大企業の自治管理は、しかし農業協同組合は、最善の条件の中で、欠くことのできない調整を保証します。そして私は、あなたが、土地労働者に関する場合、なぜ「強制権」という言葉の使用によって「権威」という言葉をより重々しいものにしなければならぬと考えたのか、本当にわかりません。「権威」は、人がもしその遺憾な実体をどうしても維持しようとするなら、参加者全員による、多数決にもとづく決定から生ずることとなります。

問 4 輸送の、長距離通信の、送電の、世界的な——ないしは、少くとも大陸的な規模の——体系の複雑さは——やや異ったさまざまな諸理由のために——生産の方式の複雑さと併行して増大します。これらの領域では、もし人が、地方間ないし国際間で補償をする（送電）、そして一方では、認められた投資の実際上の効率を拡大する（輸送と電気通信）努力をしなかったとすれば、新しい投資の費用は、生産投資の費用よりもずっと急速に増大していったことでしょう。それらの理由からわれわれは、結局次のものに到達したか、これから到達することでしょう。

——鉄道における列車の運行に対する中央の遠隔操作に。

——高速道路における進入についての中央での管理に。

——各空港を始め、航空輸送への、遠隔操作に。

——海および河の港への船の出入についての厳格な指令に。

——各生産工場によって絶えず生産される電力への、国の規模での——間もなくヨーロッパの規模での——注文に、そして時には、関係各地方による電力消費の瞬間最大限度の決定に。

——燃料ガスとガソリンの長距離輸送用パイプラインの流通についての中央集権的な指示に。

——使用者の電話ないし電信への呼び出しの中央における階級化に、そして自由

に処理しうる経路によるそれらの計画化された通信に。

そして、今あげた領域における、「調整者たち」の、異議を申し立てうるものはあっても、決定を受けるものによって犯されるあらゆる違反は、技術のない人間間的な破局に誘う危険があります。

答 国際的な面におけると同様に一国的な面での遠隔操作は、自由社会主義型の社会といささかも両立しえないものではない、と私には思われます。調整者たちの決定は、自治管理的な民主主義から生まれているのですし、調整者たちは、常に、解任されうると同様に監督しうるのですから、なぜありうる「違反」について、あるいは、少なくとも「異議申し立て」について話すことがありましようか。

問5 補給と配布の分野において、原料と最終製品の多様化は、各品目の貯蔵の相対的な減少と、「調整の」権威を前にした利用者たちのかかなり厳しい規律を伴う各品目の合理的な管理に導きます。

答 「合理的な」管理とはまさしく民主的自治管理が可能とする管理であるのにここでもまた、なぜ「厳しさ」について、「権威」について「規律」について話すのでしょうか。

問6 現代人が設定することを望んでいた、生産の、輸送の、情報の、配布の、「完成した」機構は、現代人に対して、調整の権威への服従の承認を、彼自身の自由と彼自身の発意の次第に強制される放棄を要求します。

そうした機構が、その経営への参加者各自の個人的な発意と自決とをきわめて広汎に保護する他の方法を伴って機能しうるであろうという考えは、技術的な理由によって、少なくとも、人間集団の現在のメンバーの心理的、知的、倫理的な状態においては、甚しい失望を生みだす、危険なものと思われれます。

実際、個人的な各行為が、あまり費用のかからない、調和し釣合いのとれた全体的な実現に集中するためには、各参加者がこの上ない善意と集団的献身への最良の精神を持っていることを示しても十分ではありませんまい。いわば、彼らが、起きていること、あるいは、これから起きるであろうことを（そして、かつて起きたこととはしばしば——また当然——違うであろうことを）見抜く必要があります。

指揮者のいないオーケストラが考えられないのと同様に、各運転士が信号や遠隔操作もなしに時速百二十料で、直感で列車を運転する、そんな鉄道網を考えることはできません。同様にまた、新しい飛行機の研究を任務とする業務の中で、各技師

ないし研究者が、新しいエンジンの完成が提起する多様な問題の一つについて、他のものと緊密に結びついた解決を自発的にもたらすことを、期待することもできません。

「高度産業化」といわれる社会において、各部分の諸操作の調整を、しばしば、操作者の階級化をすら強いるのは、生産の、配布の、輸送の、通信の、技術的基礎そのものなのです。

答 ここでもまた、私にはそう思われるのですが、あなたは、「服従」、「階級化」という誹謗する言葉を不適切に使っておいでだし、また、自治管理化産業社会においては個人的な自由を放棄しなければならぬと考えておられます。自由社会主義は、シュテイルナーや彼の弟子である個人主義的アナキストたちとは反対に、無制限の個人的な自由を主張したことは決してありません。制限は、社会の中で生きる必要と、個人的自由の最大限と集団的自律の最大限とを両立させる必要とから生まれた制限です。

あなたによって危険なものと見なされた個人的な発意は、逆に、自由社会主義の社会においては、全員の利益の中での、全員による力強い刺激剤、絶えざる創造力です。ヴォーリン、『知られざる革命、一九一七—一九二一年』の著者は、ブチロフ工場における、驚くべき、有益な、個人的発意のいくつかの例をあげています。残念ながらそれは、大概の場合、活用されぬままにとどめられ、共産党と共産主義国家の官僚制によって抑えられたのでした。

この第六項の中で記憶にとどめておくことが望ましい唯一の点は、資本主義制度に大いに責任のある、「人間集団の現在のメンバーの心理的、知的、倫理的な状態」は、実際、抑圧の社会から生まれた人間を社会主義的な真の人間に変えるために、おそらくかなり長い、辛抱強い努力を必要とするだろう、ということです。しかし、この変身、この新しい教育は、自治管理にもとづく、自由社会主義型の社会の中において可能な、最良の諸条件の下で実現されましよう。各自による各自の教育は、特に、自治管理の最も明確な長所の一つです。

問7 確かに「責任のある権威たち」が、彼らの「責任」が彼らに「優越性」を与えたのだと考える傾向があれば、彼らが、「執行の」役目と「調整の」役目は社会的な平等な価値とは区別されたものであることを認めるなら、「調整」ないし「階級化」は、「配下」にとつてずっと我慢できるものとなりえましよう。しかし

ながら、そこでは、社会的ないし経済的な問題よりもむしろ、倫理の問題がかかわってきます。そして、人間存在が——おそらく他の制度の下でさえも——現にあるようなものとして残る限り、生産の、消費の、配布の、現在の技術的規範がもたらしている調整と階級化の必要が、執行者たちにとって刺戟的ないかなる影響をも、もはや与えないことが可能だ、と期待するのはあまり賢明なことではありますまい。中国の、ユーゴスラヴィアの、キューバの、あるいはアルバニアの制度の下では、最下級の「責任者」が、他所でも同様に、自分が「優越している」と思う強い傾向があります。

「物質的な安楽」ないし「高い生活水準」と呼ばれるものの代償、それは人間各個人の自由の幾分か「譲渡」であると認めることは、もっともなことです。そしてこの経済・社会的な法則からのがれようとすることは、万有引力についての物理学の法則を免れようとするのと同様に、無駄なことでありましょう。

答 あなたの考察の背後にうかがわれる悲観論は、きつと、かなりの範囲にわたって中国の、キューバの、アルバニアのユーゴスラヴィアの（この国の中では、チトーの独裁が労働者自治管理によって弱められ、埋合わされているにもかかわらず）経験すらもそうであるような、権威主義的な型の社会主義制度の経験からのみ汲み取らねばならないとあなたが考えているせいなのです。人間個人の自由のどんな「譲渡」が念頭にあるのか、理解なさってみる必要があります。問題なのは権威主義的マルクス主義の諸制度が強制している譲渡なら、私はここで私の反対者であるあなたと意見を同じくします。そして、それを私はあなた同様に手厳しく非難します。しかし、反対に、自由社会主義制度の下で、個人が自由に加盟した集団の利益の中で、自発的に同意した、彼自身の自由の制限を、あなたが「譲渡」と名ずけるとすれば、その場合は、その「犠牲」は、資本主義制度の下で個人が蒙っていた、はるかに胸を痛ましめる、あらゆる他の疎外から個人がやっと解放されたという事実によって、十分に償われている、と私には思われます。なぜあなたは、連合した組合機構による自治管理と、その調整について、あれほど教訓に満ちている、一九三六—一九三七年の、スペインにおいて実施されたアナルコ・サンジカリズムの経験について一言もいわないのですか。

（以下、問答は更に三つの問題について重ねられるが、紙面の都合で省略する——編集部）。

討論資料

我々の状況と革命の戦略

編集部注 この討論資料は、麦社主催の江口幹氏を中心とした五月革命研究会最終回の討論資料として作成されたものである。（麦社では、この討論の成果を踏まえた江口幹著『五月革命の考察』を近く刊行の予定。）

ここでは、われわれ被抑圧者大衆がどういう状況の中にいて、どうなることを望み、その望みを達成するには何をすべきなのか、それを明らかにする大綱を革命の戦略と呼んでおく。

一、状況

い、われわれは、かつてない強力な、巧妙な抑圧の機構の下におかれている。それは、国家独占資本主義あるいは高度管理社会と呼ばれる体制であり、資本の利潤の安定した確保とその発展のために、それによって利益を受ける支配層諸グループが、高度に組織した社会支配あるいは社会操作のメカニズムである。その支配層諸グループを形成するのは、ブルジョアジーとそれと相互依存関係にある経営テクノクラート、行政テクノクラートである。

この体制の強みとしては、次のものがあげられる。①政策的に経済的危機を回避できるか、あるいはその損失を小ブルジョア、労働者、農民に転嫁しうること。②一定の物質的安楽を被抑圧者大衆に与えていること。それによって不満を緩和するとともに、大量消費の市場を確保していること。③このメカニズムの外ではほとんど生存しえないように組織していること。④抵抗の緩衝材として議会、労働組合、革新諸党を持っていること、それらの諸機構が補強の役割を果たしていること。⑤柔軟性を持っていて、体制の根底にふれぬ限り反体制的要求をもとり入れること。⑥教育と情報を実質上支配していること。⑦司法、警察、軍を掌握して、必要となれば強権の行使に訴えること。

この体制は次のような弱みを持っている。①資本の利潤追求という一元的な合理

主義の支配下にあつて、人間の希求を無視したり、肉体的精神的に苛酷な労働を強いていること。②経済的な二重構造の下で、底辺において物質的な安楽から除外されている層が少なくないこと。③大多数の人間が決定権からのぞかれていて、自己の意思を反映する機会を持たないこと。④生活水準、教育水準の向上、情報流通の手段の増大によつて、被抑圧者大衆の知的水準が上つてきていること。⑤生活様式の激変により、永年にわたる権威への従属的な態度が次第に失われつつあること。

ロ、以上のような抑圧のメカニズムの背後には、それを生みだし、それを支えている文明観がある。それは、物質的な安楽の増大が人間の幸福につながるという考え方で、この考え方によつて、環境汚染と呼ばれる人類の肉体的な破壊が生じ、同時にいわゆる疎外状況といわれる生産面、消費生活面における精神の破壊が進められている。

一、目 標

われわれが人間としてわれわれ自身の運命を自ら決定できるようにするためには、以上のような抑圧の機構とそれを支えている文明観を打破しなくてはならない。その打破の彼方に、われわれは新しい社会を想定する。それは、政治的には個人の自由な発意と自由な合意に立脚する直接民主主義社会であり、経済的には、経済が労働者組織によつて管理される自治管理社会であり、型態的にはコミュニケーション連合社会である。

一、目標達成のための行動と組織

以上の目標の達成は、いかなる権力的な手段によつても達成できない。それは、大衆自身によつて行なわれるものであり、自立的な大衆組織およびそれらの連携による、生産手段の奪取、政治権力の掌握を通じて成就される。そのような大衆組織としては、革命的サンジカリズム組織、地域的大衆組織、自治管理企業が考えられそれらを補助する革命的イデオロギー組織の必要性も認められる。それらの性格と機能とは次のようなものである。

イ、革命的サンジカリズム組織、未来社会において、企業の労働者管理を行なう組織であり、各種異議申し立てを通じて、企業権力に対する二重権力化を推進する組織である。単に賃金、労働時間などの利益擁護のための闘争のみでなく、労働の性格、事業の社会性をも問題とし、企業運営にかかわる一切に次第に介入してゆき、自治管理を準備する組織である。ここでは、現行体制下における非人間的な労働に

代る新しい労働のあり方や、相互理解と合意と友愛にもとづく新しいモラルの追求、社会の主人としての労働者の自己教育、直接民主主義的な社会運営の訓練が行なわれなくてはならず、そうすることによって未来社会が用意されるとともに、現行権力が空洞化される。

ロ、地域的大衆組織、未来社会において地域的な自治管理を行なう組織であり、地域住民の利害に関する各種異議申し立てを通じて、地域的行政権力に対する二重権力化を推進する組織である。未来社会を用意する、新しい人間のモラルと慣行の確立の場であることは革命的サンジカリズム組織と同様である。

ハ、自治管理企業、ユートピア運動と呼んでもよいもので、自発的な参加者の出資と労働によって運営される、農業、工場、企業、金融機関、学校である。資本主義体制の中の競争にさらされる、資本が弱小であるという制約はあるが、一定の制約を除けば現行の支配のメカニズムから相対的に離脱した組織であり、ここでは、企業権力や行政権力の下にある革命的サンジカリズム組織や地域大衆組織と違って、新しい、人間のモラルと慣行の確立のために未来社会の粗型としての実験が可能であり、生産、消費、経済計画、教育、司法、自衛などについて現実を通じての模索が行われうるし、それによって新社会を目指す他の革命的大衆組織への模範を示すことができる。自治管理企業の役割は、現行文明観の下にある既存の組織の中の革命組織形成と違って、そうした制約をはなれ、新しい文明観の下に新しい社会を形成する実験という意味で特に重要である。

ニ、革命的イデオロギー集団、先にかかげた目標の達成は大衆組織自身によってしか行なわれないが、大衆組織内部に知的な機能が欠けている場合、革命的イデオロギー集団の存在は不可欠である。この集団は、状況を分析するとともに、どのような条件の下で革命は可能か、どうすればそれに近づくことができるかを、大衆組織に示す、提案の機構であり、必要な場合には革命的大衆組織間の連絡調整に当る機構である。いずれにせよ消滅すべきものであり、革命的大衆組織、あるいはその連合の一部門として吸収されるべきものである。

問題は、革命的大衆組織による二重権力化を推進し、階級的力関係において、可能と思われる時期に、一気に攻勢に転ずる契機を見出すために、まず力をたくわえておくことである。

現代のアナキズム運動

尾関 弘著

「アクチュアルな問題に対して、アクチュアルに対応しうる運動を創出する手助けをする」こと、「状況の理論的分析よりも状況を一步でも切り拓く具体的行動提起に心がけ」ること、——このような態度が本書を書く姿勢でもあった、と著者は言う。しかし、残念ながら、著者の意図するものが結実しているとは言い難い。著者Ⅱ青年アナキストの武者修業記は、カララ大会を中心に各国のアナキズム運動の状況を軽快なタッチで描写し、それなりに面白く読めるのだが、彼の「ヨーロッパにおける体験を通して、ぼくたちの今日、明日の運動に何か伝承しえるもの」が、どうも鮮明ではないのである。

例えば、彼が、△自由連合革命△という言葉を用いながら「ぼくにとつての△自由連合△は、イデオロギー的概念であるまに、現実運動の形態、さらにその結果としての社会の△状況△そのものとしてある」というとき、△自由連合△は△状況△のなかにあまりにオブティミスティックに拡散し、無限に稀薄化してしまふのではないだろうか。

もちろん、本書にすべてを期待する訳ではないが、はたして現状をトータルに把握し変革する革命戦略なくして何がなしえようか、と思わずにはいられない。本書でなされている若干の問題提起のいっそうの展開を著者に要望すると共に、我々の共通の課題として現状分析および戦略の明確化を急がねばなるまい。(三一書房 三五〇円)

アナキスト群像

I・L・ホロヴィツ編
今村、江川、大沢訳

「訳者あとがき」のなかで大沢正道は、「ぼく自身の現在の関心の所在からいえばアナキズムプロパーという問題の立て方そのものは、射程の外におかれている。そういう問題の立て方から、なにか実りのある成果は得られないとおもわれるからである」と述べている。このような原則的立場を確認しつつ、埋もれたアナキズム

の思想や運動の蓄積を発掘する（より一層深い探究への手掛りを与えるアンソロジー）として日本語版が企画された本書は、巻末の文献目録とともに、ひとつの道標の役割を果たすものといえよう。（社会評論社九八〇円）

全体革命への序説

大沢 正道著

アナキズム関係書が続々刊行されているとはいえ、その多くはいわゆる古典ないし歴史的叙述によるものであって、そこから現実の運動への距離はあまりにも大きい。本書の（アナキズムの原理と原則）はその距離を、アナキズムに帰納的にアプローチしつつ、主体的に解体し摂取することによって埋め、さらに、既成の運動を根底的に超える（全体革命）を探索したものである。また、（プロレタリア独裁と連合主義）はレーニンの『国家と革命』との緊張関係のなかで、連合主義的過渡期論を構想する先駆的論文といえる。前記二論文を収録した本は、小冊子ながら、我々の戦線の低迷を突破するための礎石として熟読に値しよう。理論的には『反国家と自由の思想』（川島書店）と密接な関係を有しており、併読をすすめたい。（麦社 一五〇円）

ロシア革命以後

菊地 昌典編

シリーズ（現代革命の思想）の一つである本書は、反ファシズム闘争、人民戦線、スペイン戦争、スターリン批判と人間の解放の各章からなる資料集といえる。我々にとって興味深いのは、三章に収録されたルドルフ・ロツカーのパンフ（スペインの悲劇）をめぐって交されたモロウ、アルドレッド等の間の論争である。スペインの栄光、スペイン革命はいかに革命をやらねばならないかを教えた、といった類のスペイン革命の単純な讃美からは何も生まれない。我々は、モロウらトロツキストの批判に正面から答え、CNT-FAIの墮落の理論的実践的根拠を切開かなければなるまい。この論争は未だ初歩的な段階にとどまっているとはいえ従来回避されがちであった権力問題をめぐる基本的な論点を明確している点で一読に値する。（筑摩書房八八〇円）

言葉の危険③

少数決

秋山 清

「少数決」、そんな言葉はないだろう。

しかし「多数決」ということはある。あるところか、集会などで、決をとる、といえほどの意見がもつとも多数に支持されるかという、多数決を文句なしに考えてのことである。

少い時間で、何かをきめなければならぬとき、すぐ多数決によって定めることは手軽な方法である上に、今では誰もそれに不安をもたないかの如くである。不安の有無よりも、それで仕方なし、事の善悪よりもそこでは多数の指すことだけが良くて、正しいということになる。多数だからいい、ということが罷り通って、それで今日のごとく内治・外交に誰しもが不安がる日本になってきている。

「多数決」以外に何があるか。であるからには、それは人の問題である。人を得れば多数決で結構だと、ほとんど誰でもそのように思っている。

肅清をかさねて、独裁権力を樹立したスターリニズムなども結局人間の問題だといふことになってしまふ、これが多数決主義の行きつくところである。官僚主義とか、民主主義の独裁といふことは、多数決の運命であるといふように考えることが、今もつとも緊急なことではないか。

アナキストのものごとの決定は、多数決を排する。わかりきったことをいうようだが、多数決をやめて他の方法で決定するといふことを、深く考えてみる必要があるのではないか。

われわれの決定すべきことは緊急事項と永い時間を含んで考えるべき問題との二つがある。まずこの後者について思いをめぐらせてみよう。

そのときに「少数」の意見の必要と「少数決」というききなれない言葉がわれわれの思考の中に出て来る。

黒の手帖

10号発売中

200円 (〒35円)

編集=大沢正道

黒の手帖社

▶ 麦社取次雑誌 ◀

通巻3号発売中

120円 (〒25円)

6号分=800円 (〒共)

バックナンバーあり

自由社会主義者評議会(準)
=CSL機関誌

永久革命

一つの集会や集団において、多数よりも少数の見解の正しさということを、もういやになるほど経験した。少数者に比べて多数者に不和雷同がしばしばまじるからである。

「少数決」と「多数決」との対立は、多数者が少数者にすこしも勝っているものではないからである。大勢の意にしたがうことが、事の運びにおいて将来に向けて正しいものであるならば、決をとる必要などないことだ。少数が多数の意見に従わねばならないならば、少数はいつも征服されているにすぎない。むしろ、決に当って、少数意見を重んじて、その中味に討論を向け、深める、という方法がとられるべきではあるまいか。労組や平和運動などで票を奪い合うのは、彼らが同志ではなく、利害の敵対する対立者にすぎないことを、内から証明しているにすぎない。すべて低度な政治活動に要約的に置きかえているからである。

「少数決」が現実的でないどころか、はなはだ空想的だということを私はしっているつもりだ。だが、だからその非現実な「少数決」という言葉を、自分の中で考えてみたくなるのである。少数の意見が多数の意見に勝るということはいいすぎである。ただ多数によって少数を屈服したとき、すぐれているかもしれない意見は葬られ、少数者は敗者のごとき存在となる。だから規約や規則によつ「万事公論」が一部多数に制せられることに、少くも大きな危惧を感じる者がなければならない。少数の意見を殺さぬ方法を探究したいという現実的思考を私は貴ぶのである。

「多数決」には大きな矛盾、ゴマカシがつきまとう。多数決の形式をととのえて少数者が独裁するという問題が起ること。われわれはまのあたりにそれを見ている。議会で政党が多数の民衆を代表して決議した、とされるものである。その多数

決に乗って行政権を行使する政府が民衆と対立する事実など、まさに多数決のものも本質的なマヤカシにすぎない。多数決で少数が拒否されたところから、国家の戦争行為における民衆の惨虐な運命は転開するのである。

「少数決」が具体的手段として実現しがたいとすれば、全員一致ということが、ある少数が多数を制するための方法ではなく、全員が決議に責任をもつ唯一の方法である。

緊急のこと、明日旗を立てて行くか、行かぬということなどに多数決も全員一致もないものである。行くべき現実があり、行かんとする意見があり、行かざるという意見があると仮定すれば、行く意見の者が全員行けば、それこそ一致の行為である。

執行部、委員、代表機関、それらにすべてを一任して責任をもとうとしない集団の中にこそ、多数をもつて決定した方針に圧服を動向せしむる必要がおこるのである。

全員一致は、コムニオンと議会生活のかかわりにおいて将来にかかわる問題である。「少数決」という、在りもせぬ言葉をもって私は、多数決否定というアナキズムの現実問題の処理に考えを向けるべきことを、思いついたのである。

(71・3・6)

自由連合 社会革命 運動紙『奔流』創刊！

今日の困難な局面のなかで、真摯に自由連合Ⅱ社会革命運動を推進している多数のグループおよび個人が全国に存在するにもかかわらず、総体としては、未だ分散状況を克服しえていない。各地の闘いはいずれも孤立し連合の契機をつかみかねているのが実状ではないだろうか。

我々は、このような低迷状況を突破するために、自由連合Ⅱ社会革命運動情報紙、『奔流』（四月二〇日創刊予定）の創刊を提起する。

各地の闘いの報告、問題提起を『奔流』編集部へ送ること要請したい。

連絡先

麦社気付CSL

『奔流』編集部

わが国における反逆の原点(3)

鳥越 弘之

日々、平穩に過ごせばいい。そこに、さしたる不満はなかった。より厳密に云えば、不満を行爲にあらわしても、どのような利得もありはしないではないか。これが、わが国の民衆の基本姿勢であったような気がする。歴史の流れのなかに生起する、民衆による多くの反逆的事実を認めても、そのことから、わが国の民衆が反逆的であったとは認めがたい。

外庄に対する抵抗のうち、自己を賭けて己を堅守せんとするものを「反逆」とよび、賭けることを回避して、両者の力関係に意をはらいつつ、抵抗するものを「反抗」とよんで、大まかな概念区分をすれば、「反逆」は「非日常」の世界で、「反抗」は「日常」の世界で繰りひろげられると想定できよう。

しかしながら、わが国の民衆の思考と行動をみつめてみると、この原則がかならずしも、あてはまるものではないところを知るだろう。「非日常」は六〇年代から七〇年代の闘争の過程のなかで、活動家によって、その意味あいが深められてきた言葉であるが、それは、民衆の思想からはとおい。「日常」から「非日常」へ移行することによって、「反逆」の姿勢をかためるという方法を、わが国の民衆はとらない。「日常」からぬけだすのではなくて、「日常」に浸りつつ「反逆」せんとする。これはわが国の民衆の軟弱さからくるものではない。これは、さらに「日常」たらしんとしての「反逆」という、民衆の行動原因と深く関っているのだ。一般の原則論とは異なり、わが国では「反逆」と「反抗」が同じ「日常」の世界で繰りひろげられているのである。

このことは、わが国の社会構造との関連で考えなくてはならない。前回、わが国の社会構造は「反逆」たりえない構造をもっているといった。親方家に寄り添うことで、修正された自己の欲望を実現する。寄り添う家と寄り添われる家関係の累積体としてムラ（共同体）が存在していた。換言すれば、この家相互の間に上下の系

譜の糸がひかれ、これらの糸の一本、あるいはいくつかが集まって、ムラが構成されていた。

このムラ内部の自己の社会的地位は明確に決まっていた。自分自身の生存の意味あいは、自己にひきつがれた系譜の糸を、より高くひきあげ、より長くひきずることであつてみれば、自分という一人の人間の「反逆」、自己の属する一戸の家の「反逆」は、系譜の糸を断ち切る大罪を犯す以外のなにもでもなかった。しかもそれは、自分自身の生存の意味あいを否定することのみならず、糸をひきずってきた先祖を、ひきずるであらう子孫を、ひきずっている親族を、つまり他者をも否定しなければならなかった。自己の否定は他者の否定と密接に結びつき、この紐帯が「反逆」せんとするものの行動をにぶらせた。それゆえにこそ、「反逆」のきざしのあるときは、村ハチブとし、いわば八分がた村づきあいを停止して、「反逆」の根をおさえ、系譜の糸をひきずらせるために、二分の動きを許した。しかしながら本来は、村ハチブとは、恐ろしいものゝとしての相互威嚇であり、「反逆」を夢想させないための手段であつた。

だが時間の流れのうちには、「反逆」を迫られるときが、かならずあるものだ。それに対処する方法は二つあつた。一つは、その社会構造、その価値体系から逃避することであり、他の一つは、その社会構造、価値体系を背負つたまま「反逆」に向かうことである。

前者の逃避という方法は自分一人、あるいは、自分の家族という小単位で行動にうつせるので、比較的、便宜な方法である。

「曾て羽前の尾花沢附近に於て、一人の土木の工夫が、道を迷うて山の奥に入り人の住みさうにも無い谷底に、はからず親子三人の一家族を見たことがある。これは粗末ながら小屋を建てて住んでは居たが、三人ともに丸裸であつたと云ふ。

女房がひどく人を懐しがって、色々と工夫に向つて里の話を尋ねた。何でも其亭主といふ者は、世の中に対してよほど大きな憤懣があつたらしく、再び平地へは下らぬと云ふ決心をして、こんな山の中へ入つて来たのだと謂つた。」（柳田国男『山の人生』）

「世の中に対してよほど大きな憤懣」とは具体的にどのようなものであつたかは、いまのわれわれには想像できないが、「よほど大きな憤懣」をいだいて、家族とともに山に消えていく姿を彷彿と想い浮かべることはできる。この「姿」自体はきわ

めて人間くさいし、また現在のわれわれにとっても、身近なものと感じとるからであらう。この、現在の言葉でいえば、「蒸発」はおそらく、人間の歴史とともに古いものであらう。

それに対し、後者の「反逆」は、わが国特有のものといっている。

なにゆえに「反逆」するかといえば、わが国の民衆の場合、日々、営んでいる生活（日常）を外部から変形させられるからである。それは年貢とか労役に関するものであったり、宗教である場合もある。いずれにしろ、わが国の民衆の「反逆」は、新たな変革をねらうよりはむしろ、いままで具備された条件を死守するという姿勢にあった。「日常」からぬけだすのではなくて、さらに「日常」たらんとしての「反逆」であった。また、社会構造の問題があった。「反逆」できない社会構造のなかに練り込まれているものが、「反逆」せざるを得ない位置に追い込まれれば、どうすればいいのか。

どこかで悪循環を切るしかない。そこで通常、切断点として選ばれるのが、比較的、自足的まとまりをもつムラ（共同体）である。つまり、ムラ構成員全体が「反逆」するという形をとる。そうなると、行政の末端機構に練り込まれている名主階級が一番微妙な動きをとらざるを得ないが、多くの場合、実質上ムラの側についてしまっている。これは当然であらう。そしてまた、この当然の動きをとることによって、往々にして一番悲劇的なめにあっている。

それはともあれ、ムラ・レヴェルで切断し、ムラ内部の社会構造、価値体系（日常）を内包したまま「反逆」にむかう。一揆のとき、ムラからムラへまわされる天狗回状は、円形に村名が著してあることが多く、ムラ単位でそれに呼応し、動きをとる。「反逆」をねらうものたちのみで新たな集団を形成して、行為にうつるといふことがない。

この構造は、さきほど指摘した「日常」たらんとしての「反逆」と深くつながりをもっていることは、いわずもがなである。

ところで、外圧といってきたものが、支配者によってなされているものであることは指摘するまでもないことだが、この外圧は、「権威」と「権力」に二分して考えることができる。この場合、「権威」は「日常」と結びつき、「権力」は「非日常」と結びついている。

わが国では「権威」の最頂点が天皇にあたる。「権力」を奪取したものが、それ

を支えるものとしての「権威」をねらい、目標達せずと知るや、それに寄り添う形式をとったことは歴史に示すとおりである。この「権威」は民衆のなかにも色濃く生きている。最高権威としての天皇だけでなく、血筋（家格）および系譜上、より先祖に近くいるもの、つまり本家とか親は一つの「権威体」である。民衆のなかからはじまる「権威体」の累積が、天皇にまで至るのだ。

「日常」の世界に住み、さらに「日常」たらんとしているものにとって、「非日常」と結びついている「権力」は即座に否定の叫びをあげることができる。だが、「日常」と深く結びつき、一見「日常」を支えているかに見える「権威」を否定することはむずかしい。だが「権力」は、いわば枝葉であり、その軸となり、根となっているものが「権威」であってみれば、このむずかしいものに抗争していくよりほかにことを知らされる。

(未完)

編集後記

反権力・反国家運動の拡大・深化という我々の課題は、(内的なものを含めて)現実との緊張関係ぬきにはありえない。にもかかわらず、現実のアナキズム運動にそれが著しく欠けていたことは否めない事実である。高畠論文は、スペースの制約もあって必ずしも十分に展開されてはいないが、その陥穽を鋭く衝いた示唆的な好論文である。クリエイティヴな論争の契機としたい。

我々は、原則主義的反対派にいつまでも甘んじてはいられないのだ。(原則主義的反対派に安住すると、脳硬化症にかかる危険が大きい——『左翼医学事典』より)

乱 RAN 3号

1971年3月20日発行(月刊)

定価 70円(〒25円)
 定期購読 6号分 500円(〒共)
 編集者 『乱』編集委員会
 発行者 秋山清
 発行所 麦社

東京都豊島区南池袋1-15-21田中ビル207
 tel. (03)987-5765 振替東京 144722

全体革命への序説

一五〇円
（〒35円）

大沢正道

「アナキズムの原理と原則」「プロレタリア独裁と連合主義」の二論文を収録。研究会テキスト等に好適の入門書。

研究会等で十部以上まとめて申込みの場合、割引あり

アナキストの文学

二四〇円
（〒45円）

秋山 清

「アナキストの文学とアナキズムの文学」、「アナキストの文学」、「昭和の詩人群」からなる本書は多年にわたりアナキスト詩人として活躍してきた著者の総括ともいえよう。

私の見た

日本アナキズム運動史

増補版

近藤憲二

四月刊行 予価三〇〇円（〒45円）

大杉の片腕として活躍した著者が体験をもつて語る日本アナキズム運動史。基本資料としても高く評価される。再版にあたり、新たに秋山清氏の解説を加えた。

クロンシュタットの反乱

独裁と革命

ペルクマン

残部僅少
二〇〇円
（〒35円）

ファブリ

残部僅少
二〇〇円
（〒35円）

麦 社

東京都豊島区南池袋 1—15—21 田中ビル207
振替口座 東京 144722 tel (03) 987—5765